

---

# 山田リサイクルショップ

新

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

山田リサイクルショップ

### 【Nコード】

N9199E

### 【作者名】

新

### 【あらすじ】

明はどこにでもいるような普通の女子高生。毎日変わらない日々をおくっている。そんな明にはただひとつ、誰にも打ち明けられない悩みがあった。その悩みを同級生の金沢に話したところ…

## 第1章 そんないつも（前書き）

少し実話が入っている、普通の少女の話です。  
自分自身が女子高生の時に書きました。17歳の戯言だと思って見てください。

## 第1章 そんないつも

また、声がする。

いつもの音、いつもの時間、いつもの感情

全てを抑えながら

目を閉じる

「ごめん英語訳見して」

頭を支えながら美樹に手を差し出した。

「まーたー？」

ウンザリしたような顔をしているがきっちり書かれたノートを私に貸すために机に出しっぱなしにしている。

「すみませんね」

ノートを受け取ると美樹が私の目元を見て言った。

「また寝不足？」

「ええ？なんで」

俯きながら笑うと美樹は真剣な顔をした。

「そんなクマ作って。寝不足って言ったのは明だよ」

そう。言った。最近私は寝てないと。授業中寝るのは仕方ないと。

でも…その理由だけは言えずにいた。

「はよーざいまーす！」

真理がお菓子を口いっぱい頬張りながら近づいてくる。

「おはよう」

私達が挨拶すると食べ続けながら言った。

「きーてよ！昨日田口くんがさあっ」

いつもの真理の男話だ。1日の最初は必ず男の話をする。私はいつもの通りさっと聞き流した。

学校は　普通。だいたいこの3人でいる。休み時間も移動教室もトイレもいつも一緒だ。

真理は他の子の所にいたり遊んだりもしてる。美樹とは中学生の頃からの友達。真理と違ってサッパリしてるっていうか：いつも一緒にいても違和感がない。女の子の友達はいるみたいだけど男子と話してる所はほとんど見たことがない。

まあ、私もあんまり話さないが。

「……………そんなトコらしい」

長ったらしい真理の話が終わった。美樹も内容は聞いてないらしく鈍い返事を返している。2人の気の抜けた顔を見て呆れた調子で言った。

「あー…もっと地味目な感ぢの子の話する？」

…イラつく…

今日も昨日と同じで授業が終わった。

部活へ向かう人、バイトへ急ぐ人、居残る人、それぞれが教室から

散っていく。カバンを手に持ち、ただ家に帰る組の私が足早に教室から出ようとする後ろから声がした。

「早坂、ちょっと」

振り返ると先生が私に手招きしている。

「はい」

返事を返し近寄ると、手袋とゴミ袋を手渡された。

「なんですかこれ」

不満そうな顔で先生を見上げた。少し驚いた表情の先生が

「何って…お前美化委員だろ？」  
と言った。

「え…？」

委員会って… …

ああ！！

「はいそうです美化委員です！」

委員会の仕事なんかしたことがなかったから入っていたことすら忘れていた。

「じゃあよろしく」

1人残された私はどうしたらいいかわからなかった。なにすればいいの？てか、美化委員で男も1人いなかったっけ

なんて考えながらとりあえずゴミ捨て場に行ってみた。ゴミ捨て場には沢山のゴミが積み重なり1人先生が立っていた。



## 第2章 金沢雪夜君

「おお、2年4組の美化委員か。」

それ以上先生がなにも言わないから両手を振りながら聞いた。

「先生、これなにすればいいんですか？」

さっきの担任同様、この先生も驚いた顔をした。

「おいおい。委員会入ってもう3ヵ月近く経ってるんだぞ？ いい加減覚えなさい」

覚えなさいって…だってなにやるかなんて聞いたことないし。わかるわけないじゃん！ つうか、もう1人の委員はどこだよ！？

「すみませんわかりません。教えてもらえますか？」

嫌みに聞こえないように。でも少し反抗するように私は声を出した。すると先生との目線が合わない。

すぐに後ろから声がした。

「三澤先生。」

…この先生三澤先生って言うんだ。なんて一瞬思っただけで振り返った。

あ。

「金沢。同じクラスだろ？美化委員の仕事教えといてくれ」

そう言うのと三澤先生は校庭の方へ向かった。

そうだ…もう1人の美化委員。金沢君

金沢、雪夜君。

無言で私の前を通ると、鮮やかな手さばきでだらしなく結んであるゴミ袋の口を締めた。

手袋とゴミ袋を両手に持って突っ立ってる私はまるで役に立たない存在だ。

私に見向きもしないで他のゴミ袋の口をきつく締め続けている。先生の言葉なんて聞かなかったみたいな感じだ。だからどうすればいいの！？苛立つ私は思わず声を出した。

「ねえ…」

すると後ろからキンキンする複数の女子の声がした。

「これえ！！これもっ！！お願いしまーすっ」

めちゃくちゃ大きい今にもはちきれそうなゴミ袋をドサツと私の目の前に置いてさっそうと行ってしまった。

どうしたらいいのかわからず私はとりあえず中に入れようとゴミ袋

を持ち上げた。腰に来るほど重い…思い切りゴミ袋を抱え込むと

ブリッ ドサドサー

足元にゴミが散乱した。

前かがみになった体制のまま金沢君が口を開いてこっちを見る。

「なにしてんの？」

初めてちゃんと私の顔をまともに見た。そういえば話したことない。なんてそんなことじゃなくて

「ごめん」

まばたきもしないで金沢君の顔をまじまじと見ながら真顔で答えた。

「ごめんあのさ、教えてくれる？…仕事」

金沢君の顔は見えなかったが、肩の動きからして確実にため息をもらした。しかも大きめの

一通り美化委員の仕事を説明してくれた金沢君は

「わかった？」

と最後に付け足した。

喋り方が巧いな。なんて考えながら私は首を前に傾けた。

### 第3章 印象

金沢君。そう、私はこの人と同じクラスだった。

実は密かにクラスの中では上位の男子なんじゃないだろうか。なんて考えていた頃もあった。

私はチャラチャラしてる男が嫌いだ。

髪を染め、ピアスをあけ、ケツまで制服のズボンをずり落としているような 男子。

彼等は彼等なりの自己表現をしてるようでそうでない。結局すべてがみんなのマネ、みんなに合わせてるだけであってそこには自我なんて存在しない。

それを『かっこいい』と思い違えてる人は多く、先生にピアスを注意された時自慢げに辺りを見渡しながら大声をはって先生をちゃかすような男子がいると、それだけでかなり胸くそが悪くなる。

まあ、何が言いたいのかと言うと金沢君にはそういう要素がない。どこか大人びた感じがすると私は思っていた。ちゃんと自分を持っていて、周りのことになど左右されない人：

なんて、私なりな評価を付けたところで私の考えも周りとは違っていた。

2年になったばかりの頃真理は自分のクラスを見渡しながら、言った

「けっこー今年いいかも！去年は男子終わってたからなーっ」

満足そうに言う真理の目に1人の男子が映った。

「あれ誰？」

周りに人がいるのに大声で思い切りその男子を指差した。

私が、わからない。と答えるとすぐさまその男子の所に走っていった。戻ってくるるとまた大声で

「金沢君だってえー！前は7組だったらしいよ？」

と聞いてもいないのに話してくれた。真理の話はまだ続く。

「きつと下の階だったから気づかなかったんだねーあんな背、高いから気づくもんだと思った」

敬礼をするようなポーズで金沢君の背の高さを表した。

金沢君は特別かつこいい訳ではなかった。ただ背の高さだけが彼を目立つ存在にさせていた。

背が高くてノリがいい。この要素だけで大抵はだいたいの女子にモテる。しかし金沢君は違っていた。

それは不思議ちゃんならぬ不思議君だと言うこと。私はそこだけが気になっていた。

彼の出す雰囲気は人とは違う気がした。なにか特別な人というわけではなかったが雰囲気だけは、違う気がした。

そんな真理と私とはうって変わって美樹は金沢君のことなどこれっ

ぽっちも興味など持っていなかった。騒ぐ真理を見た美樹は私の横で小さく

「ばっかじゃないの」

と言った。

この時ら辺からだろうか：美樹はなぜか内向的になっていった。男子とは全く話さず、女子もクラスの人としかつき合わない。私に比べれば女友達は多いほうだったが一定の女子としか話さなくなった。

真理の方と言うと、それ以来金沢君にしつこく話しかけ、その度に金沢君は少し会話をして逃げるように教室から出ていってしまった。すっかり気を悪くした真理は1ヶ月後には金沢君の印象が最初とは全く変わっていた。

「あんな暗い子と思わなかったー。気づかないの当たり前だわ」

その後は金沢君に完全に興味をなくしたらしく、他の悪ぶっている男子と時間を共にするようになっていた。

私の中でも『話にくい人』と金沢君はインプットされ、話すことは一度もなかった。

まあ、前に言ったように私は男子とは話さない方だが。

## 第4章 告白

「とりあえずここ片づけよ。」

金沢君の言葉で我にかえった私は足元の膨大なゴミを見た。暑さと臭いでやられそう：

しゃがんでゴミを集めようとした。が、

「ゴミ袋破けたしどうしようか？そこのゴミ置き場に余ったゴミ袋ある？」

すると金沢君は私の手を指した。

「さっきから持ってるそれ、ゴミ袋じゃないの？」

自分の左手を見ると、しっかりとゴミ袋を握りしめていた。

「あはは、うん。」

金沢君と無言のゴミ拾いが始まった。どうしたら1日でこんなにゴミを出せるのか考えながら拾っていると、金沢君の顔が目に入ってきた。

何この沈黙…

どうしたらいいかわからない私は息が詰まった。暑さと、ゴミの臭いと、この沈黙の息苦しさ。この場から走って逃げ出せたら…なんて考えていても仕方がない。

私は一番簡単に解消できそうな問題に取り掛かろうとした。

「金沢君」

金沢君が目を上げた。

「何」

…金沢君…語尾に『?』が付いてないよ

「金沢君は女の子嫌いなのか?」

何言ってるんだ。

言葉が出た瞬間思った。金沢君は私から目を離さないで言った。

「別に?」

…別に。その毒の無い表情と言葉の調子になぜか私は気が軽くなった。

「私は、

私はずっと金沢君と話たいと思ってた。」

私の中ではこの告白同様の言葉を金沢君は顔色一つ変えないで聞き終えた。

言葉の後に追いついてきた感情が心地よく私の心臓を鳴らす。



金沢君は一瞬下を向いて顔を上げた。

「で？」

予想もしなかった答えかたに私は硬直した。

『で？』

私が困惑した顔で金沢君を見ると

「え？　なんか話あるんでしょ？　何？」

この人は友達とかいるんだろうか。私はそんなことを思ったがなかなか金沢君は目を離してくれないので口を開いた。

「今ちょっと…悩みがあつて」

何を口走ってるんだろう。

自分で自分がわからない。悩みてまさか…

『あの事』を言う訳じゃないでしょ？

金沢君の顔は見なかった。

無言ってことは続けていいんだよね

「最近…寝不足で」

金沢君とは違って拙い言葉しか出てこない自分に腹が立った。

「寝不足？　なんで」

金沢君は私の言葉を返しただけ。なのに、どうしてこうも嬉しくなるんだろう。

「上に住んでる人が…声が、気になって」

まだ金沢君の顔は見れない。金沢君は少し動揺したようだった。

「え、夜に…」

間が空く。

「声？」

私はすぐに動揺の原因に気づいて付け足した。

「あ、いや…子供の声が」

私は言うつもりだろうか

「子供の泣く声が…夜中に聞こえてくるの。毎日」

こんな言い方じゃ足りない。

「泣き叫ぶ声…女の人の怒鳴り声が…」

冷や汗が流れそうになり思わず顔を上げた。

え…っ？

金沢君の顔を見た私は声を出しそうになった。明らかにウンザリした顔をしている。

自分の手についたベタベタした液体をティッシュで拭きながらは…っ　と失笑した。

「俺にそんな話がしたかったの？」

ティッシュをゴミ袋の中に押し入れると私の目を見た。

「ね。」

口を開けっぱなしにしていた私は思わずよだれが出そうになった。

よだれを引っ込めると同時になんでこんなこと言ったんだろう？という後悔の念が洪水並に押し寄せてきた。

そんな私の気持ちなどお構いなしに金沢君は話を進める。

「俺さ、なんか早坂さんのイメージって結構よかったんだよね。他の女子みたいに無駄にうるさくないし、ちゃんと考えてるって感じで。」

今の話を言う前の私が聞いていたらきつと物凄く嬉しいんだろう。けど今は違う。続きは聞きたくない

「なんかよく掴めない人なんだね。てゆうか、最初からそんな話されても引くよ。」

なんかよくわかんないんだけど。えっと…なんだっけ？ 虐待

？」

自分が何を言われてるのか理解するまでに少し時間がかかった。

私…クラスで不思議君と思われてる人に引かれてるの？

持っていた菓子パンのゴミを手から離すと金沢君は自分の方にゴミ袋を引き寄せて力強く口を縛った。

「はい。仕事終わったよ。じゃあ俺帰るから」

そばに置いてあったカバンを手に取り金沢君は立ち上がって行ってしまった。

これが私と金沢君の最初。

## 第5章 プールと金沢君

今日もまた同じ時間が始まる。

けだるい暑さの中そんな事を考えながら教室のドアを開いた。

嗚呼。ありえない：

以前までは見ようとしなかった金沢君の席を真っ先に見た私は自己嫌悪の念に襲われた。

気にしたことなんてなかったじゃないか。

今まで気にしなかった人を気にしだすと、どうしてこうもしつこく私の心をちらつかせるんだ。金沢君はこっちを見ない。私は昨日の言葉をふと思い出した

『俺とそんな話がしたかったの？』

そんな話：私があれば悩んでることを『そんな』で片づけた金沢君を見てると怒りが込み上げてきた。

もちろん、そんな話をした私の方がもっと苛立たしい存在なのだが。

辺りを見渡さず真っ直ぐに机につくと先生がショートホームルームを始めた。

先生が教室から出て辺りが騒がしくなってもじっと机を睨んでいると真理の顔が視界に入った。

「ハヨ。余裕だねえ？」

鋭い目で真理の顔を見ると真理は一瞬ひるんですぐ気を取り直した。

「あ…もしかして忘れた？」

「ワスレタ？」

話の流れに合っていないその言葉に私はすぐ反応した。

「うん。次体育だよ？」

体育…

「前に間違えて持ってきた体育着あるから大、丈夫」

真理の顔と他の女子を見ればわかる。今日は

「プールだよ。始まるって言ってたの忘れた？」

「ワスレタ」

さっきと同じ調子で繰り返すと真理はこいつ大丈夫かあ？みたいな目で私を見た。

「まあ別にあれですとか言えば平気じゃない？」

「あれってなにがー？」

透き通った水色の可愛らしいビニールの手提げを持った美樹が近づきながら言った。

「何。プール行かないの？急がないと着替えらんなくなるよ」

「2人先行っててくんない？」

そのまま2人が行ってしまうと教室には誰もいなくなった。金沢君はいつ教室を出たんだろ？朝見たとき水着の用意なんか持ってた？

また。自分が嫌になり大急ぎで体育着に着替えプールに走った。息を切らしてプールにたどり着くと何人かの女子男子が水着に着替えてプールサイドにいた。

高2にもなってスクール水着…私の学校は2年までプールの授業がある。ハッキリ言って私は卑猥な物があると思う。男子にとって自分が気になってる女の子の水着を見れるなんてめったにない機会だ。あまり先まで想像したくない…

そんなアホな妄想をかき消そうとすると先生の姿が目に入った。私が近づく先生が私に気づいて名簿を見ながら言った。

「早坂は…何組だったかな」

「4組です」

「おっ。あつたあつたーそれで？どうした」

体育着姿の私を厳しく見てボールペンを手にした。私は迷わず

「生理です」

言うと反応は早かった。

「わかった。全員集合!!」

大声でそう放つと恥ずかしがっている人人がぱらぱらと集まりだした。

見学者のたまり場と思われる屋根付きのベンチを見つけると足早に近寄っていった。

私の他にも見学者はいるらしく、他のクラスの女子2人が品定めをするようにキャアキャア騒ぎながらプールサイドを見ていた。

もう1人男の子がいる。目があうと無表情で私に言葉をかけた。

「早坂も見学？」

金沢君が私の足下を見て言った。

「ウン。金沢君も？」

早坂も見学？って言われたんだから見学に決まってるだろう。と自分にツツコミをいれると金沢君もそう思ったのか、無視された。

金沢君と1人分のスペースを開けてベンチに腰掛けた。地面が太陽に照らされて熱い。

足を水たまりに引っ込めると生ぬるい水がピチャリと音をたてた。



その瞬間、自分は何を嬉しがってるんだ？と我に返った。外は暑いのに私の感情も一気に覚める。いや冷める。昨日のことを思い出せ…

「なんで見学？」

先に口を開いたのは金沢君だった。ツンと前を向いた私は素っ気なく

「水着忘れたの」

とだけ言った。

ゆっくり目を金沢君の方に向けると、金沢君は下を向いてほのかに微笑んだ。

「そっかあ…」

のどの奥が変な音をたてて鳴った。  
だから、なんで私この人

惹かれるんだろ…

きつと理解はしてもらえない。この人の空気が好き。  
好き…もう違う感情なのかもしれないけど。

「金沢君はどうして見学なの？」  
思わず嬉しい声が出た。

「あー…早坂と同じ」

面倒臭そうに返事を返した。

何その言い方。

「そ。あ、でもさでもさ、男子って水着忘れると外周3周じゃないの？ いいの？ バレない内に行った方がいいよー」

言い終わって金沢君の顔を見ると、自分の周りにブンブン飛び回るハエを見るような顔で私を見た。

「走んなくていいの」

「なんで？ 走ってる子いるよ？ ほら帰ってきた。」

1人の男子を指さすと金沢君はなぜか悲しそうな顔をした

「いいんだよ、俺は」

顔を伏せたまま起き上がらない金沢君を見て私はなぜか優越感を感じ、光が反射するプールの水を細い目で眺めていた。

## 第6章 眠れない夜（前書き）

ここから少しシリアスになってきます。

こんなのを『シリアス』と呼べるかはわかりませんが…

## 第6章 眠れない夜

プールの授業が終わるとクラスのみんなが教室に戻っていった。

教室に入ると湿っぽい空気がクラス中に溢れていた。美樹を見ると腕をダランとたらし、椅子に座っている。

「大丈夫？」

声をかけると火照った顔を私に向けた。

「うん…ちょっと私、トイレ」

そう言うのとフラフラと教室から姿を消した。

廊下の方を眺めていると後ろから人の気配がした。真理がへの字に結んだ口を開けると

「さっき何話してたの？」

と言った。

「さっき…？」

何話した

「あ、金沢君と？」

真理の表情が呆れ顔になる。

「他に誰かと話してました？」

嫌な雰囲気になると分かってても嘘はつかない。

「日常会話。」

この漠然とした答が真理をイラつかせると分かっている。真理は小さい声で笑った。

「『日常会話』するほど仲よかったんだ？」

いやあ、明、男子と話すなんてなかったから」

なんでもないように言ったようでも、違う。わかるよ。

真理は私が男と話すのを快く思っていない。たまに私が目立つ行動をしても、そう。そういう性格なんだろうけどいつも自分が優位でいたいんだ。

だから私が男子と話すのも気に入らない。ムカつくまではいかなんだだろうけど『なんで明が？』くらいにはきくと思ってる。そういうところが、嫌なんだよ。

私の勝手じゃない

あんた中心の世界じゃないじゃない

自分が特別な存在だとも思ってるんだろけど何もできないじゃない

水泳の後の猛烈に眠くなる授業が続き、やっと下校時刻になった。

カバンを持って廊下を渡ると横目に美樹を見た。なにやら他のクラスの子と仲よさそうに話している。そっか…美樹

『何が言いたいのか言ってみろよ。』

心の中から声がした。

そっか美樹…他のクラスにも友達いたんだ。

…また声がする…

『それは真理とはどう違うの？「他にも友達がいたんだ」これは見下してる言い方なんじゃないの？  
あんたと真理は何が違うって言うの？』

…違う声が響く。

『真理みたいに本人の前でそれを言わないこと。  
真理みたいに別に不愉快に思ってる訳じゃないってこと。』

こうなったら私の中での争い。

『いいねえ、自分のことはいいように考えられるもんね。』

そう。自分には甘い、私。

夢を見た。

今日美樹と一緒にいた女の子が目の前にいる。どうやら私はこの子が好きらしい：私の気を引こうと私にひつこくつきまとう美樹。誰かが遠くからこっちを見てる。

目を凝らすと金沢君だった。

ねえ、助けてよ。美樹がひつこくてもう嫌なの。私はもう終わりにしたいのに。そんな遠くにいないで、こっちへ来てよ。

そんなことを思うと、金沢君が口を開いた。

『じゃあその女の子の手を離せば？』

私はもう1人の女の子を見た。イヤ。この手はなぜか離したくないの。それは無理だよ。見かねた金沢君は再び口を開いた。

『はい。仕事終わったよ。じゃあ俺帰るから』

金沢君は行ってしまった。

待ってよ、ちょっと待って。ねえ。ねえ…私の話ちゃんと聞いて。

ねえ！！！！！！！

目を開くと薄暗い天井が目に入った。…もう夜か…クーラーをつけっぱなしにしていたので体中が冷たい。

「さむ…」

電気をつけようと立ち上がると何かにつまづいて前に倒れた。予想外の音がしてとりあえず何かが壊れた。と瞬時に思った。

勘弁してよ…打った足をさすりながら電気をつけると辺りに本が散乱していた。

壊れたのは本棚らしい。棚から落ちて部品がかけていた。…もう。イライラして時計を見ると12時を指していた。

そんなに寝ちゃったの！？あゝ…もう！

部屋片づけて  
本整理して



化粧落として  
お風呂入って  
歯磨いて

髪を乾かすところまで終わると時計は2時に近づいていた。  
なんかやってないかな。テレビをつけると面白くなさそうなバラエ  
ティー番組がやっていた。  
しばらく笑ったりあくびをしていたりした。

すると、一気に首筋に悪寒が走る。

いつものが、来た。

テレビの音量はそこまで小さいわけじゃない。でも私の耳はここま  
で敏感に反応するようになった。

私は音量を少しずつ大きくしていった。そうだ、ここは笑うところ。  
笑え。私の脳に命令する。

しかし生理的反応はこれだけじゃ収まらない。あっという間に私の  
全身を恐怖で包み込む。汗ばむ手で消音のボタンを押した。

ふすまを何回も何かを叩きつける音、子供の泣き声、母親のわめき  
声。

これが始まったのは引越してから1ヶ月くらいしてから。つまり  
もう一年以上は続いている。

私の勘違いかもしれない。これも教育のひとつなのかもしれない。  
みんなこれ位するのもかもしれない。いつもそう思ってはこの時がく

ると怖くてたまらなくなってしまう。

やめて……

泣き声は止まらない。

もうぶたないで

ふすまが響く音が大きくなる

うるさい……

母親の金きり声がつんざく。

[illegible]

思い切り壁をけつとぼすとさっきぶつけた所が当たって涙が出るほど激痛を感じた。布団の中に潜り込む。

いつもそうだ。もう嫌だ。明日こそ手紙を入れてやろう。『虐待はやめてください』って書いてポストに入れとくんだ。

もしくは児童相談所に電話をしよう。なんとかしてあの子を助けるんだ。

でも、次の日は決まってなにもなし。私の生ぬるい決心は夜が明けるとともに消え去っていく。

そして今日も、惨めに布団に潜って恐怖が静まるのを待っただけだ。

声が響く……

『自分が特別な存在だとも思ってるんだろうけど何もできないじゃない』

それは他でもない、

『私』なんだ。

## 第7章 発覚

「明…明！ちよつと起きてっ」

騒がしい中美樹の声が響く。ぼやーとした景色が目の前に広がった。寝過ぎた。

「もーっ！何回起こしても起きないんだもんっもう授業全部終わったよ？シヨートも！」

「ん…なんか、すつご眠い」

目頭を押さえながら答えると美樹からため息が漏れた。

「土日寝なかったの？今日はまだ週の最初だったのに…ちゃんとしてようよ」

私の顔を覗き込む表情は心配そのもの。

私ができると美樹以外の人にこの言葉を言われたらきつとイラつくんだろうな。

お節介。口出ししないですよ。なんて思ったり。でも、美樹は嫌じゃない。

てか、美樹って本当に私のこと考えてくれてんだなあって思うから。大体は自分のしっかり者をアピールしたい人がお節介ってやくものなんだと思うけど。昔から美樹は嫌、じゃない。

「うんごめん。大丈夫だよ。ありがと」

そう言うと美樹は安堵の表情を見せた。

可愛い。

「美樹帰らないの？」

出し抜けに聞くと美樹が一瞬びくつとしてすぐに落ち着いた。

「うん。今日ちょっと友達待ってるんだ。」

どんだん声が小さくなり最後の方はよく聞こえなかった。

「ふうん…こないだ隣のクラスで話してた子？」

これまた軽い調子で聞くと美樹は完全に動揺したようだった。

「へ？あ、うん。」

そっか、と私は言いカバンを手を取った。

…なにか忘れてる

月曜日。なにがあったんだっけ。

美樹が私に別れを言い隣のクラスに向かうと私はすぐに思い出した。

「美化委員…」

そういえば、金沢君が仕事の説明をしてくれたとき言ってたっけ。

『月曜日はウチのクラス当番だから、放課後ここに来てね。』

金沢君はもう教室にいない。私はとりあえずカバンを置いてゴミ捨て場に向かった。

階段から覗くと金沢君の姿が見えた。一生懸命にゴミを運んでいる。ずっとここから見ていたい…

金沢君の姿をこんなにまじまじと見たのは初めてだった。でも、こんな所を見つかっても大分気まずいのでそのまま階段を降りた。

「あ、来た。」

金沢君の目が私を見た。私はなぜか目を合わせられず居心地悪そうに周りをキョロキョロ見渡した。

「ごめん。遅くなった。」

「別にいいけど、今日こっちはもういいからこれ、運ぶの手伝ってくれる？」

やら重たそうな棚を指差しながら金沢君が言った。

持ち上げるとそれはずしりと重たく、立っているだけで汗が吹き出た。

「これ、カートみたいなものとか…っ」

「ない。」

キッパリ言うとながが持っているものよりはるかに重そうな柵を持って歩きだした。

学校を半周くらいしたのだろうか。

とうとう腕が限界まで来た。とりあえず金沢君を追ってここまで来たが一体ここはどこだろう？

今まで学校にいて見たこともない場所だった。

3年間この学校に通い続けて、この場所に足を踏み入れず卒業した人も少なくないんじゃないかと思った。ちょっとした中庭だ。人気は少なく、遠くから野球部のかげ声が小さく聞こえる。

その奥にある小さな建物に金沢君は近づいていった。大分古そうだな。私が、ここ？と聞くと首を前に傾けた。

中に入ると薄暗く、天井までありそうな柵に必要ななくなった教材などが無造作に置かれていた。

私がそこに持っているものを置こうとすると

「違う。こっち」

と、もう一つの扉を顎でさした。

扉を開くと真っ暗な部屋がそこにはあった。

めっちゃくちゃカビ臭い！柵持ってるから鼻つまめない！ダッシュで部屋のすみに置くと、勢いよく振り返って出口を目指した。

私は学習能力のないアホだ。足元にあった何かにこの間同様、足をぶつけて前のめりになった。

思わず、目の前にいる金沢君の背中に手をついた。踏みとどまった私は、よかった、金沢君を押し倒すようなヘマはしなかった。しなかったのに、ひどくビクついた金沢君は瞬時に私の腕をつかんだ。

「なに…っ

ビククリした…」

目を見開いてそう言った金沢君は今まで見たことのない顔だった。

「ご、めん」

手を引っ込めると ふうと安心したかのような表情を私に見せた。私が出ていこうとすると金沢君が邪魔した。

「先生に…そっちにあるラインカー持ってきてって言われてんだけど。」

もう一つの奥の扉を金沢君が指さした。早く出たいのにつ  
私がゆっくりと扉をあけるとこちらもごちゃごちゃした部屋があっ  
た。

この部屋は涼しい…なんて思うと、すぐ中の異変に気づいた。私は  
金沢君にあっち行けという風に手をはらった。

「なに？」

金沢君が聞く。

「私持っていくから先戻って…」顔だけ覗きながら言った。



「は？なんで」

金沢君が入ってこようとするので私はイライラと声を出した。

「いいから戻ってよ：こっち来ないで。はい、じゃあね」

金沢君は首を傾げて行ってしまった。

私は見つからないようにゆっくり部屋に入っていた。

そう、『見つからないように』

この部屋には誰かいた。この小さい隙間から1人は見えている。

美樹だ。なにしてるんだろ？

話し声からして誰かといえることは確かだ。私は目を凝らした。

覗き見は趣味じゃない。けど、今日の動揺といい美樹は最近変だ。ずっと仲のいい友達に何が起きてるか知りたかった。

ううん、知らない方がよかった。

好奇心旺盛で浅はかな私は、人がそれぞれの秘密を持っていることに気がついていなかった。

私はしばらくその穴を覗いていた。声がしなくなった。私の心臓の鼓動だけが聞こえる：

もう一人の後ろ姿が見えた。

キスしてた。

私の視線は2人の足元にいった。

美樹とキスしてるその子は、髪の毛の長い、スカートをはいた

女の子 だった。

## 第8章 放課後

ラインカーを持って建物から出ると、そこには金沢君がいた。ぼーっとする頭で問いかける。

「先帰らなかったの？」

金沢君は大分イラついてるみたいだ。

「それ、どこ持ってくとか俺言わなかったし。つーか何してたの？」  
不審そうに私を見た。

「あ…電話、してた。」

私はケータイをポッケから少し出して言った。

「中にいるときかかってきたんだけど、ほら、バイブにしてて。聞かれたくなかったから会話。」

ウソを並べると金沢君はすんなり信じた。

「そう。それ持ってくから、貸して。」

手を私に差し出しながら言った。

金沢君にラインカーを渡そうとすると、受け取りながらよく意味のわからない言葉を発した。

「それで…どうなの？最近」

私は間拔けな顔で

「え？」

と答えた。

なにが、どうだって？私が真顔で金沢君の顔を見ると気まずそうに口を開いた。

「上の階の人…」

予想外のその言葉に私の脳が反応するまで少し時間がかかった。

『上の階の人』…？

「え。え？うん、えっとそれなりに…」

言いたいことが出てこない。つか、なんでいきなり？

「最近、ひどい」

熱を込めて言う和金沢君は私の顔を見ていなかった。

「フーン…じゃあ、今日家行っている？」

今度はもっと言葉を理解するのに時間がかかった。

「な、——家？」

私達はいつの間にかカップルになったんだろうか

「今日なんか用あんの？」

そうゆう問題じゃねえだろ！思いっきり心の中でつつこんだ。

ああ、暑い。今日の最高気温は34度だっけ……？早く帰ってお風呂入って着替えたいよ。  
今日みたいな日にもしもクラスの男の子に家に行っていいいかなんて聞かれたって絶対嫌だね。まっぴらごめんだよ。

金沢君を見た。

私がこんな汗かいてるってのに……この人はどうしてこうも涼しそうなんだろう……

肌は冷たいのかな。

触ってみたいなあ。

体温を感じたい。

「いいよ。」

5分後

私は教室にいた。金沢君はもうカバンを持っていたので、学校の近くのセブンで待たせていた。

私は教室を見渡すと、ギクツとした。美樹のカバンがある。ということは教室に戻ってくる可能性があるということだ。私はなぜか美樹に怯えていた。

ううん、ちゃんと理由があるんだ。

さっきの金沢君の言葉がショックで忘れていた。ふいに思い出すと、止まっていた血が徐々に流れ出すように私の心になんとも言えない感情が広がった。

なんだよあれ。

理解し難い。意味がわからない。美樹は女の子が好きってこと？なんで？いつから？

疑問がわいて出てくる。私は、今まで美樹とずっと一緒だった。中学の頃から。でも、そんな雰囲気を出したことなんて一度もない。確かに男子とは話さなかった。でも私も話すことは少ない。

なぜずっと一緒にいてわからなかった？私に隠してきたの？わからない。わかんないんだけど

突然、廊下から足音が聞こえた。弾けるように教室を出た私は、げた箱まで無我夢中で走った。そしてげた箱を開いた週間、我に返り失笑した。

私はなんかの犯人か？

もちろん、それは違う。けど、知ってしまったことに少なからず罪悪感を感じていた。

胸がざわざわする。今度美樹に会うときどんな顔をすればいいの？

私はこうやって自分を追いつめるのが好きなのかもしれない。自分が主役になった気分になるんだ。

それが例え他人の『事件』であつたとしても自分の身に起きたように置き換える。

別に美樹に言わなきゃいいだけ。

胸の奥にしまえばいいだけ。

人の事情に首をつっこんで息まいてるだけ。

虚しい…

靴を履いた私は、キツパリとさっきのことを忘れることにして、コンビニに急いだ。

コンビニに着くと、金沢君がいない。

ここって言ったのに…辺りを見渡すとコンビニの中でファッション雑誌を手にする金沢君が目に入った。

金沢君はチラリと目を上に向けると雑誌を戻し表に出てきた。

「暑くて。中いたんだ」

「ね、暑い」

私は毎日登下校している道に足向けると、鈍い足取りで歩き始めた。

まさかこの道を男の子と2人で歩く日が来るとは。

人生は全く予想外だ。こんな予想外が続いて、私も誰かと恋に落ちちゃったりするのだろうか。

金沢君を見た。そんな事おきやしない、とその瞬間思った。

「早坂さんはさあ、下の名前、明るって書いてアキラって読むの？」



急にそんな事を聞くので一瞬表情が固まった。

「あー…違う。明るいつて書いてアカリ。明って読むの」

聞いているんだか聞いてないんだか金沢君は眩しそうに空を見上げた。

「金沢君はユキヤでしょ？雪夜君。」

空を見上げたまま金沢君は顔を横に振った。

「違うよ。雪に夜って書いて、セツヤ。」

え、あれ？

目を丸くして金沢君を見ると、下を向いて微かに笑いながら目だけをこっちに向けた。

「嘘。ユキヤで合ってるよ。みんな俺のこと名字で呼ぶのに、よく知ってるね」

まるで私があんたに相当興味あるみたいじゃないか。金沢君は頷きながら

「うん。そっかー…アカリ、ね。」と言った。

私は、いや、そんなことないのはわかってるんだけど、でも、こんな風に下の名前を確かめ合うってことは…

「早坂さんの家って近いんだね」

肩にものすごい力がいっていたらしく、ため息をつくとも肩から痛みが消えていく感じがした。

「よくわかるね」

「だってこの学校で歩きで来る人なんかいないんじゃないの？」

「そだね。でも美樹はもっと近いんだよ。私は歩いて10分くらいだし。」

私も美樹も近いからこの学校入ったみたいなもの」

金沢君との会話はこれで終了し、すぐに家に着いた。

「いっ？」

「うん。」

いつもより倍の汗をかいてマンションの戸を開いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9199e/>

---

山田リサイクルショップ

2010年12月26日02時47分発行